



特集 「新教科書」— これからの英語教育

『CROWN English Communication I』の編集方針とその概要

慶應義塾大学 霜崎 實

はじめに

高校英語検定教科書の編集に携わって10年あまりになる。その間、少しでも完成度の高い教科書をつくるべく、さまざまな新しい試みを行ってきた。いわば、「理想の教科書」をイメージとして描きながら、その目標に向かって、議論や思考錯誤を通じてイメージを具体化してきた。

今回、学習指導要領の改訂に伴い、新たな「理想の教科書」を目指して編纂したのが『CROWN コミュニケーション英語 I』である。本稿では、編集上特に留意した学習指導要領改訂のポイントについて簡単に触れ、それに沿ってどのような教科書に生まれ変わったのかについて、できるだけ具体的に紹介したい。

「学習指導要領」改訂のポイント

今回の学習指導要領改訂の第一のポイントは、「質量面での格段の充実」が求められているという点である。これまでも「発展的な学習内容」として、全体の2割を目安として選択教材を導入することが可能であったが、今回の改訂によりこの上限規定が廃止され、同時に「教科書観」の見直しが要求されることになった。つまり、「教科書に記述されている内容は、すべて教えるものである」という教科書観から脱皮して、「個々の児童生徒の理解に応じた指導の充実」に資する教科書、「児童生徒の学ぶ意欲の向上に資する教科書」、「児童生徒の自学自習に資する教科書」といった教科書観への転換が求められているのである。このような教科書観の転換にともなって、現場においては「教科書を教える」という考え方から「教科書で教える」という考え方に移行することが求められることになる。

第二のポイントは、「コミュニケーション英語」と

いう科目名変更からもうかがえるように、「聞く、読む、話す、書く」の4技能を有機的に関連付けつつ、総合的なコミュニケーション能力の養成を目的とすることが明記されている点である。授業ではこれまで以上に英語によるコミュニケーション活動を充実させることが求められる。もちろん、すべての授業活動を英語で行うことが想定されているわけではない。たとえば、複雑な文法事項について英語で指導することまで求められているわけではないが、英語によるディスカッションや発表など、積極的なコミュニケーション活動への取り組みが推奨されることになる。

第三のポイントとしては、教育基本法の改訂にともない、伝統文化の尊重の精神を養うことが明記され、英語教科書においてもそれを反映した教材選択が求められることになった。具体的には、教育基本法第2条第5号に、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」という点に配慮した教科書編集が求められることになったのである。

「学習指導要領」改訂を受けて

以上の改訂のポイントを考慮し、『CROWN コミュニケーション英語 I』の編集にあたって、以下のような基本方針に沿って編集を行うこととした。第一のポイントについては、現行版以上に選択教材を増やすことによって、「質量面での格段の充実」という要請に応えることとした。これによって、現場においては教科書の題材を選択的に扱うことが可能になり、結果として多様なニーズに応えることができるものとなった。

第二のポイントについては、4技能をバランスよく扱うことを追求する一方で、多様なテーマを取り

上げ、生徒の思考力や知的好奇心に訴えるような題材を厳選し、それをベースにさまざまなコミュニケーション活動を組み込むこととした。その意味で、いわゆる英会話教材とは一線を画すものであることは言うまでもない。

第三のポイントについては、海外の情報を受信するだけでなく、日本についての情報発信が求められている現在にあって、自らの文化や伝統について英語で発信する能力を養成することは、これまで以上に必要になってくる。こうした考え方にに基づき、後に触れるActivitiesやOptional Readingで、日本の伝統文化について適宜取り上げることとした。

題材のテーマと構成

本課で取り上げた題材のテーマは、科学・生き方・環境・言語・芸術・格差社会・遺跡発掘・動物の知性・平和・情報化社会の問題など、きわめて多岐にわたっている。具体的にテーマと概要を示したのが以下の表である。

本課は10レッスンから構成されている。このうち

『CROWN English Communication I』

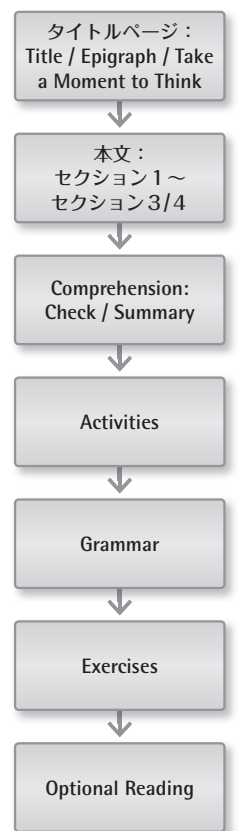
レッスン	タイトル	テーマと概要
Lesson 1	Going into Space	[科学・生き方] 若田光一氏が国際宇宙ステーションでの活動経験や宇宙開発の意味について語る。
Lesson 2	A Forest in the Sea	[環境問題] 東京湾のゴミの埋め立て地を緑化することによって、「海の森」を実現しようとするプロジェクトを紹介する。
Lesson 3	Writers without Borders	[言語・国際性] 言語や文化の境界線を越えて活躍する3人の女流作家の体験から、外国語を学ぶことについて考える。
Lesson 4	Playing by Ear	[音楽・若者の生き方] ピアニストとして活躍する辻井伸行氏の体験を通じて、音楽による感動について考える。
Lesson 5	Food Bank	[格差社会・NPO] 貧困に苦しむ人々に食料が行きわたる仕組みを作ったチャールズ・マクジルトン氏の活動を紹介する。
Reading 1	Wisdom of a Fool	[ユーモア] 中世のトルコに実在したとされるムラ・ナスルディン主人公とするユーモアに富んだ小説を読む。
Lesson 6*	Roots & Shoots	[環境教育・動物] ジェーン・グドール氏がチンパンジーの習性・人間との類似性・環境教育について語る。
Lesson 7	Diving into History	[歴史・遺跡発掘] アレクサンドリアの海底遺跡の発掘に成功した考古学者フランク・ゴディオ氏の考え方を紹介する。
Lesson 8*	Not So Long Ago	[平和・歴史] 20世紀を写真で振り返りつつ、戦争と平和について考える。
Lesson 9	Paddling a Log?	[情報化社会] 情報が氾濫するインターネット社会において、情報をどのように扱ったらよいのかについて考える。
Lesson 10*	Good Ol' Charlie Brown	[生き方・価値観] チャールズ・シュルツ氏の作品を通して、生きる上で何が大切かを考える。
Reading 2	The Luncheon	[ユーモア] サマーセット・モームのユーモアに富んだ古典的な短編を読む。
Optional Lesson	Two Dreamers, One Dream	[自由・平等・平和] キング牧師とオバマ大統領の自由・平等・平和についての考え方を紹介する。

各レッスンの流れ

各レッスンの流れは以下の図に示した通りである。

タイトルページでは、レッスンのテーマを端的に表現したエピグラフを用意した。また、Pre-reading活動のひとつとして、生徒の背景知識を活性化させる目的で、Take a Moment to Thinkを新設した。本課への導入を英語で行う際に活用していただきたい。

各レッスンの流れ



本文は650語程度から850語程度の英文で、各セクションが見開き2ページで構成され、合計4セクションからなる。傍注で慣用表現を取り上げ、脚注で新語リスト、慣用表現のパラフレーズや例文を挙げるほか、本文の理解を確認するための設問を設けた。さらに、各セクションの終わりには、リスニングによる内容理解の質問も用意した。

本文の末尾には、Food for Thoughtを新設した。これは、OECDによる国際学習到達度調査（PISA）における「読解力」を意識したもので、生徒が情報を取り出し、解釈し、本課を再読することで、より深い理解に到達するきっかけを提供したいと考えている。

Post-reading活動として、最初にComprehensionのセクションを設けた。Checkにおいては、multiple choice形式の内容把握問題を4題用意した。問題作成にあたっては、瑣末な問題は極力排し、内容の骨子に関係する問題に絞った。続いて穴埋め形式のSummaryを用意した。ここでは、単に穴埋めすることで活動が終わり、ということではなく、生徒独自に英文の要約を作成させ、その上で教科書の要約問題をさせることで要約の仕方を学ばせるような創意工夫も考えられる。

Activitiesでは、本文のテーマに関連した短いダイアログ（巻末に掲載）を聴かせた上で、内容把握、作文、口頭によるコミュニケーション活動をすることができるように構成した。また、Optionにおいて英文の設問を設けたが、これはインターネットなどで情報検索を行い、さらに発展的な活動を行うことを期待している。

Grammarでは、そのレッスンで導入されている文法項目を2～3点取り上げ、簡単な解説と例文を提示した。また、今回新たに導入した試みとして、生徒が疑問を抱くようなポイントを取り上げたコラムを設けた。文法を単なる暗記の対象とするのではなく、理解して納得することが重要であるという認識に基づいたものである。

Exercisesでは、Grammarで学んだ文法項目の理解を確認し、適確な表現活動に結び付ける訓練をするための練習問題を用意した。穴埋め形式、語形変換、部分英作文問題、整序問題など、さまざまなバリエーションの問題を解かせることで、文法理解を深める指導に役立てていただきたい。

Optional Readingでは、本文のテーマに関連した内容を扱った300語から350語程度の英文を取り上げた。発展的内容を扱ったもので、本文の内容をより深く理解する助けとなるはずである。

ここで特筆すべきは、Lesson 1の“Message from Koichi Wakata”は、若田光一氏から寄稿していただいたものである。英文は高校1年生には若干難しいが、日本語訳を掲載することで、原稿をそのまま載せることにした。Lesson 6の“Message for High School Students”は、グドール氏から寄稿していただいたエッセイである。この場を借りて、両氏にお礼を申し上げたい。

「リーディング・スキル」と「音声」の指導

従来、リーディング・スキルについては、「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」では扱っていなかったが、今回の改訂にあたり、「コミュニケーション英語Ⅰ」から導入するように方針を切り替えた。特に談話標識やパラグラフの構成についての知識は、読解のみならず、ライティングについても重要なことである。

また、音声指導については、Sound Studioというコーナーを設け、[1]音の連結・脱落・同化、[2]文の区切り、[3]強勢とリズム、[4]イントネーションに焦点を絞って、英語の音声の特徴について取り上げた。こちらも適宜、活用していただきたい。

おわりに

以上、『CROWN コミュニケーション英語Ⅰ』の編集方針とその概要について述べてきたが、どこまで目標とする「理想の教科書」に近づけたのだろうか。第一に、ゆとりのあるレイアウトを実現すると同時に、写真による視覚的な情報もより充実させることができた。第二に、テーマの多様性という点からも、Optional Readingを設けることにより、新たな選択教材を導入することができた。第三に、英語によるコミュニケーション活動についても、授業での活動の助けとなるようなさまざまな工夫を施した。一言で言えば、より進化した教科書を実現できたものと確信しているが、最終的には現場での活用を通じて初めて、「理想の教科書」が本当の意味で実現することになる。現場の先生方のご理解と創意工夫を切に望む次第である。